



丘の上の
カフェテラス

来間タロー

小高い丘に並ぶ 閑静な住宅街を抜けて
石畳の坂を上った処に 小さなカフェがある

カフェの名前は Benvenuti (ベンヴェヌーティ)
イタリア語で ようこそ という意味だ

この店は 創業25年になる コーヒーと手作りケーキの店で
店内には イタリアの風景写真が飾られており
奥には 陽当たりの良い 花壇があって
四季折々の花を見ながら コーヒーが飲める ガーデンテラスもある

特にこのガーデンテラスが この店の人気で
いつからだろう このガーデンテラスで ティ・アーモ セットを食べたカップルは
必ず結ばれ 幸せになれる という噂が広まっていた

ティ・アーモ セットは エスプレッソ(イタリアンコーヒー)とチーズケーキの
セットで オーナーいち押しのオリジナルメニューだ
ティ・アーモとは イタリア語で 愛してる を意味する

今日もまた 付き合い始めたばかりの 初々しいカップルが
ガーデンテラスで ティ・アーモ セットをオーダーしていた

テラスで楽しそうに食事をする二人の姿は
自分もいつか あの場所で と夢描く片思い中の男女にとって 憧れでもあった

そんな中 カウンター席に一人の少女が腰を下ろすと
すぐさま マスターがオーダーを取りに来た

「ベンヴェヌーティ(ようこそ) 今日一人で 珍しいね。」
「チャオ、..ちょっとね。」

「さては、友達とケンカしたとか？」
「そうじゃ無いけど……」

「で、今日は 何にする？」
「いつものやつ お願いします。」
「ヴァ・ベーネ(了解)」

自称 50歳という ヒゲのマスターは
少女がオーダーした いつものやつを 作り始めた

この少女が いつも頼んでいたものは ティ・アーモ セットで
毎回 同じ高校の仲の良い女友達と テーブル席で お喋りしながらセットを食べていた

オーダーしたセットが届くまで 少女は カウンターテーブルに置いてあった
フリーノートを読みながら 過ごしていた

このフリーノートは この店に来た客が何でも自由に書いて良い らくがき帳である
パラパラと読んでいくと いろんな思いを持った人が店に来たんだと 想像できる

一番多かったのが 片思いを両想いにするぞ という意気込みを書いたもの
二番目が 両想いになれた という報告内容
三番目が 恋愛中だが思い通りに進まない などであった。

中には 自分の将来の夢を3ページにも語っている若い男子もいたり
純粹に庭が綺麗だとか ケーキが旨かったという感想文もあった

しばらくして マスターが カウンターからセットを運んできて言った

「へい、お待ち。好きやねんセット！」

「あはは、なんか 定食屋みたい。」

「やっと、笑顔になってくれたね。

いつも元気なお嬢さんが うつむいてる姿を見るのは辛いよ。」

「……」

少女は恥ずかしそうに視線を反らした。

「良かったら、話してみなよ。少しは気が楽になるかも。」

「昨日、パパとママが大ゲンカしたんです。」

「そうだったのか、でも夫婦喧嘩は犬も食わないって、つまらない事が原因で
すぐまた仲直りするだろうから……」

「以前はそうだったけど、ここ数カ月は違うんです。」

「そうか、申し訳ない。嫌な事言わせてしまったね。」

「いえ、大丈夫です。」

「ま、食後のデザートをサービスするから機嫌直して ゆっくり食べてよ。」

「ラッキー。」

そう言うとマスターは カウンターの奥へと引っ込んで行った

少女は フリーノートを読みながら チーズケーキを食べていた
そして 恋に悩む人の気持ちを感じ取っていた
自分だけじゃないんだ みんな 悩んでるんだ そう考えていた

少女は フリーノート2冊を読み終える頃 ケーキを食べ終えた
すると 若い女性店員がデザートを運んできた

「マスターからのサービスです。」

少女は デザートを食べながら 両親の事を考えていた
毎日ケンカしている両親も 恋をしたんだろうか
どっちが先に 好きになったのか どんな恋愛をしたのか
若かった頃の両親のことを想像していた

デザートを食べ終える頃 マスターが満面の笑みで 奥から出てきた

「いいもの 見つけてきたよ。」

「何ですか、そのノート？」

「初代フリーノートさ。コレがこの店のフリーノート第1冊目で、
今、君が読んでたのは25冊目という訳だよ。」

「大体、1年に1冊のペースで、25年掛けて25冊目になったよ。」

「へえ、歴史があるんですね。」

「良かったら、読んでみて、初代フリーノート。」

「はい、じゃ少し。」

パラパラと読み始めた少女に マスターは もう一杯エスプレッソをサービスした

初代フリーノートの5ページ目に書かれたカップルの のろけ話
男は 君を幸せにすると書き 女は いつまでも付いて行くと書いてあった
そして そこに書かれてある名前を見て 少女は目を疑った

少女のノートを持つ手は震え 高鳴る胸が苦しかった
その のろけ話を書いた男女は 少女の両親であったからである

書かれた日付は 1985年 7月28日

今から 25年前 少女の両親が共に 17歳の夏休みだった

少女は半信半疑だった これを書いたのが 本当に両親なのか
それとも単なる 同姓同名の 偶然か 少女には答えが出せなかった

そして 答えを見つけるべく 少女はマスターの方へ視線を向けた

「これって、まさか。」

「そう、25年前、当時高校生だった 君の両親が書いたものだよ。」

「えっ、でも、どうして この二人が私の両親だって知ってるんですか？」

「それはね……」

「もしかして、マスター ストーカー？」

「ちがーう！！ 失敬な。人間きの悪い事を言わないでくれよ。」

「じゃ、何で？」

「実はね、この店をオープンした時に 君の両親は よく来てくれてたんだ。

当時は流行らなかつたガーデンテラスで あの二人は とても楽しそうだった。

そりゃ、ケンカしたり、ママを泣かせた時もあったかな。

当時の二人にとって この店は特別なデートコースだったようだ。」

そう言うとき マスターは古い二枚の写真を少女に見せた

一枚目は 仲良く並んだ若いカップルの後ろに マスターが立っている

「これは？……」

「この写真はね、君の両親が結婚式を挙げる前日に来てくれて、記念に撮ったんだ。」

そして、もう一枚の写真には 若い両親の間で

赤ちゃんを恥ずかしそうに抱くマスターがいた。

「この赤ちゃんは？」

「ははは、君だよ。生まれて1カ月の君。」

「ええー！！ 私、赤ちゃんの時から この店に来てたの？」

「そうだよ、君が生まれて17年 高校生になった君が ここに来てくれた時

どこかで見た子だと思ったけど 思い出せなかつた。

でも、今日 君が誰かが判ったよ。綺麗になったね、当時のママそっくりだよ。」

ヒゲのマスターは 目を潤ませ しみじみと少女を見つめた

少女は 照れ隠しに 庭へ行き 花を見つめるように振る舞ったが

少女の頬には 涙がこぼれていた

しばらくして 少女は家に帰る事にした

何事も無かつたような いつもの帰り際の挨拶

「アリヴェデルチ (じゃ、またね)」

「グラッティエ (ありがとう)」

家に帰った少女は 相変わらず言い合いをしている両親に割って入った

「今から 25年前の夏休み パパはママに 君を幸せにするって言ったんだよね？」

それにママは いつまでも 付いて行ってくて 言ったんだよね？」

激しく言い争っていた夫婦は 顔を赤らめ 少女を見つめて 声を揃えて言った

「何で、知ってるんだ？」

「さあ、なぜでしょう……」

夫婦は 不思議そうな顔をして見つめ合っていた

少女は しめた という思いで 続けた

「若い頃、よくガーデンテラスに行ってたんだよね？」

私が生まれた時も テラスに連れて行ってくれたんだよね？

毎年 結婚記念日には テラスで……」

少女は言葉に詰まり 泣きじゃくった そして 声を震わせながら言った

「パパ、ママ ケンカしないで。」

これを聞いた夫婦は 少女を抱き寄せ 三人で泣いた

父親は「悪かった、もうケンカしないからな。」と言い

母親は「ママも そう約束するわ。」と言った。

翌日 丘の上のカフェBenvenuti (ベンヴェヌーティ)のガーデンテラスには

ティ・アーモ セットを食べる仲の良い親子三人の姿があった